

■岡田武松 気象学者。第4代中央気象台長。気象観測に多大な貢献、日本海海戦に'天気晴朗ナルモ浪高カルベシ'と予報。

おかだたけまつ

佐賀の乱・1874= 千葉県葛飾郡布佐町で、海産物を扱う商家に生まれる。

沖縄県編入・1879= 5歳：布佐初等小学校に入学、課外に和算を学ぶ。

明治14年政変1881= 7歳：  
岩倉具視没・1883= 9歳：  
千葉県出身の傑出した地図学者伊能忠敬に敬意を持つようになり、

国民之友始・1887=13歳：上京し、東京府立尋常中学校に入学。

帝国憲法発布1889=15歳：

大本教・・・1892=18歳：卒業し、第一高等中学校に入学。物理学を中村清二らに学ぶ。  
この頃、利根川の水害が多発していたことから、防災科学や気象学を志すようになって、  
日清戦争始・1894=20歳：

白馬会・・・1896=22歳：卒業し、東京帝国大学物理学科に入学。山川健次郎、長岡半太郎らの指導を受け、

Bushidou・・・1899=25歳：卒業。中央気象台技手となり予報課に勤務する。大日本気象学会機関誌(気象集誌)に論文を発表し始め、  
ピアノ国産化・1900=26歳：早くも、各測候所の勤務者対象とする気象観測練習会で、最も重要な気象学の講義を受け持ち、  
田中正造直訴1901=27歳：\*「近世気象学」を公刊。

日露戦争始・1904=30歳：技師に昇進し予報課長になるとともに、外地の気象観測を行う臨時観測課長を兼任。  
日露戦争終・1905=31歳：\*日本海海戦の天気予報責任者として、'天気晴朗ナルモ浪高カルベシ'と予報、連合艦隊から大本営宛に打電された有名な電報のもとになったと言われる。

アヲキ創刊・1908=34歳：東京帝国大学理科大学講師を嘱託される。それまでの予報業務の実績をまとめた「気象学講話」を刊行、以後、改訂増補を重ねて行く。

韓国併合・・・1910=36歳：世界に先駆けた海上船舶の無線通信はじめ、  
大逆事件判決1911=37歳：前年に発表した「日本の梅雨期について」で理学博士となり、  
明治天皇没・1912=38歳：寺田寅彦らと気象談話会を組織して、  
大正政変・・・1913=39歳：毎月文献紹介を行い、

民本主義・・・1916=42歳：専門家ばかりでなく、農林業や交通・土木など関係産業の人にも役立つ「雨」を刊行、

ハルビン条約・1919=45歳：東北帝国大学教授を兼任。海難防止のために海洋気象台の設置を働きかけ、  
大暴落・・・1920=46歳：神戸海洋気象台の創設と同時に初代台長に就任。  
原敬首相暗殺1921=47歳：「気象学」を起稿、  
水平社結成・1922=48歳：中央気象台付属測候技術官養成所(気象大学校)が設立されると、熱心に指導し始め、  
関東大震災・1923=49歳：\*第4代中央気象台長(のちの気象庁長官)となり、海洋気象台長も兼任。直後に、大震災に遭遇、地震観測網の整備の整備充実を図る。

護憲三派圧勝1924=50歳：震災で「気象学」原稿焼失し、再び起稿。「イギリス王立気象学会よりサイモンズ金牌を贈られて、  
治安維持法・1925=51歳：名誉会員となり、日本地理学会が設立され同人、創刊された「理科年表」の気象部の監修者となる。  
円本時代始・1926=52歳：東京帝国大学を兼任。後進の育成に尽力、藤原咲平とともに学派の総帥として活躍。  
金融恐慌・・・1927=53歳：6年越しとなった「気象学」を刊行。

共産党事件・1928=54歳：  
世界恐慌・・・1929=55歳：英文で「日本とその隣国の気候地図帳」。早くも「気象学」の増補版を刊行、  
満州事変・・・1931=57歳：岩波科学叢書「気象器械学」。英文で「日本の気候」。陸軍省の気象に関する講師。帝国学士院会員となる。  
五一五事件・1932=58歳：小川琢治らと地人書館(地理学講座)の編集顧問となり、「気候」を執筆。(岩波講座地理学)には「気候学」を執筆、自然地理だけでなく人文地理にも深く関わる内容になっている。

国際連盟脱退1933=59歳：「測候瑣談」、  
帝人疑獄事件1934=60歳：京都帝国大学文学部地理科で気象学を講義。以後5年、東京文科大学地理学教室で気候学を講義。「気象学」が岩波叢書に入る。

芥川直木賞始1935=61歳：海軍航海学校気象学教授、  
二二六事件・1936=62歳：海軍省より気象事務を嘱託されるなど、陸海軍から気象事業への高まる圧力に抵抗もし、  
日中戦争始・1937=63歳：「續測候瑣談」。「気象学礎石」上巻を刊行。「海洋観測船(凌風丸)の新造を推進、  
健保+総動員1938=64歳：さらに「気象学」が岩波全書に収録される。  
第二次大戦始1939=65歳：全国の地方測候所の国営移管を完了させるなど、気象事業の発展に尽くして、敵性用語禁止で、フェーン現象に風災の字を当てたことでも知られる。

日米開戦・・・1941=67歳：\*中央気象台を退職し、帰郷。  
・・・1942=68歳：「航空気象学」「改稿気象学講話」。以後3年、「気象学」の姉妹編で、中央気象台附属測候技術館養成所での講義案に新規の資料を付け加えた「理論気象学」全三巻を刊行、

年金+総武装1944=70歳：測候技術官養成所の講師を改めて嘱託され、  
敗戦・・・1945=71歳：  
新憲法公布・1946=72歳：  
三大事件・・・1949=75歳：「気象学の開拓者」「気象学通論」。文化勲章を受章。

独立回復・・・1951=77歳：

自衛隊発足・1954=80歳：この年まで講師を続けて、  
55年体制始・1955=81歳：「気象学講座・別巻」、  
国連加盟・・・1956=82歳：没した。